平城京出土の渤海産黒色土器

ー第149次

はじめに

平城宮や平城京の出土品に、あきらかに他地域から持ち込まれた黒色土器があることは、以前から注目されていた。唐あるいは渤海からの将来品の可能性があるとして注目された黒色土器は、平城宮の東大溝SD2700から出土した蓋、高杯などで、きわめて丁寧に磨きが施され、漆器のような光沢を放つ[1)]。これらは奈良時代に出現する黒色土器Ａ類とは明らかに異なる器形、胎土であることや、国内に類例を見出せないことから、外国からの将来品と見られてきた。さらに、文献資料などに渤海との交流が確認できることや、渤海地域で黒色土器が出土するという、わずかな情報から、これらの生産地に渤海をあてる推定が通説化した感が否めない。

しかし、近年のロシア沿海地方での発掘調査の進展によって、渤海地域での土器様相がわかりつつあり[2)]、従来推定されてきた黒色土器は渤海地域には見出せないことや、逆に未報告資料のなかに、渤海地域の土器である可能性が高い黒色土器があることがわかった。本稿の目的は、この未報告の黒色土器について、今後の研究に資する基礎データを提示することである。

出土資料と出土地点

渤海産の可能性が高い黒色土器は、小型の壺頸部片２点で、接合関係は確認できないが、同一個体とみられる(図292)。口縁端部と体部を欠く。西市近くの右京八条一坊十一坪（平城第149次）の調査で出土した。出土遺構および層位は、西一坊坊間大路の西側溝SD920の黒褐土で、奈良時代中頃の土器を多く含む層である。

体部を轆轤成形し、頸部内側に粘土を貼るように積み足しているため、内面には粘土の接合線が良く観察できる。頸部は外側から絞るように成形しており、内面には絞りによるシワが確認できる。外面の磨き調整は、不鮮明ながら横方向の後、縦方向に施すことが観察できる。

胎土は緻密であるが、細かい石英、長石をやや多く含み、やや大粒の赤色粒子も観察できる。胎土の色調は淡褐色、表面はやや鈍い銀色がかった黒色で、日本で出土する黒色処理の土器と比較するなら、奈良時代から平安時代に盛行する黒色土器よりも、中世の瓦器椀や瓦質土器に似るといえる。

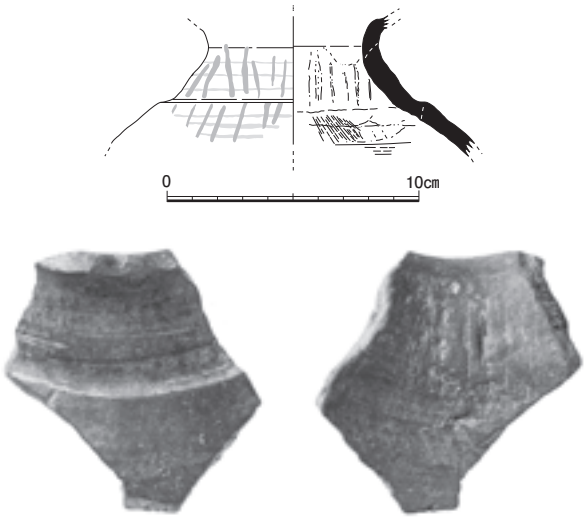

図292　西一坊坊間大路西側溝SD920出土黒色土器（実測図は１：３）

ま と め

新羅土器や越州窯青磁など、平城京から出土する外国産陶磁器を概観すると、壺や甕などの貯蔵具が多く、西市や東市に近い京域からの出土が目立つ。これは、日本で出土する新羅土器について、江浦洋が述べている[3)]ように、交易品を運ぶ容器だったのであろう。

最近では、奈良市教育委員会による平城京左京五条四坊十六坪の調査（HJ613）でも、井戸SE513から渤海産の可能性が高い黒色土器の甕が出土しており[4)]、渤海の土器についても、交易品の容器として持ち込まれた壺甕類が少なからずあったことをうかがわせる。

一方で、従来渤海産の可能性が指摘されていた平城宮出土の光沢をもつ黒色土器は、平城宮の中枢部から出土しており、器種も蓋や高杯など供膳具である点で、大きく異なる。これらの生産地については、今後、渤海地域以外の黒色土器にも目を向けた再検討が必要である。

（神野　恵、小嶋芳孝／金沢学院大学）

註

1）巽淳一郎「平城宮東大溝SD2700出土の黒陶片」『年報1993』1993、玉田芳英「式部省東方・東面大垣の調査－第274次　３．出土遺物　土器・土製品」『奈文研年報1998-Ⅲ』1998。

2）小嶋芳孝「第５章　クラスキノ城跡井戸出土土器群の考察」『北東アジアの歴史と文化』北海道大学出版会、2010。

3）江浦洋「海をわたった新羅の土器－土器からみた古代日羅交流の考古学的研究－」『ヤマト王権と交流の諸相　古代王権と交流５』名著出版、1994。

4）中島和彦・松浦五輪美・池田裕英・原田香織「平城京跡（左京五条四坊十五・十六・四条大路）の調査　第623・631・638次」『奈良市埋蔵文化財調査報告年報』平成22年度、2013。この資料の実見にあたり、奈良市埋蔵文化財調査センターの三好美穂氏にご厚配いただいた。